

モモの新品種 ‘白陽’ の育成

笹邊 幸男・藤井雄一郎・各務 裕史・片岡 正治*
木村 剛**・紅谷 文夫***・平松 竜一*・依田 征四****

Breeding of a New Peach Cultivar ‘Hakuyo’

Yukio Sasabe, Yuichiro Fujii, Hiroshi Kagami, Masaharu Kataoka*,
Tsuyoshi Kimura**, Fumio Benitani***, Ryuichi Hiramatsu* and Seishi Yoda****

緒 言

岡山県の‘清水白桃’は外観が優れ、肉質良好で付加価値が高いことから、県下のモモ栽培面積の約3割を占める基幹品種である。しかしながら、年によって生理的落果が多発するという欠点があるため（依田ら1980）、生産が不安定である。そこで、品質が優れ、生理的落果が少ない新品種を育成するため、当場では、様々な組合せで交配を行い、有望個体を選抜してきた。その中で、‘清水白桃’より品質がわずかに劣るものの、同時期に成熟し、生理的落果が少ない個体を育成した。この個体は2001年4月に‘白陽’として品種登録された。

なお、‘白陽’は1990年～1996年まで岡山県果樹研究会モモ部会の会員22名が試作した結果、生理的落果が少なく、生産が安定することが明らかとなり、会員から品種登録に対する要望があった品種である。

育成経過

‘白陽（系統番号265-3）’は1981年～1984年にかけて岡山県立農業試験場（現岡山県農業総合センター農業試験場）において17品種61組合せで交配した514系統の中から選抜した。1983年に‘都白鳳’に‘山根白桃’を交配して育成し、1992年までに‘265-3’を含めて果実品質が優れる18系統を一次選抜した。これらの系統は2個体ずつの複製個体を育成し、1989年から1997年まで二次

選抜試験を行い、品質優良で、生理的落果が少なく、豊産な3系統（系統番号‘265-3’、‘103-1’及び‘105-1’）を選抜した。その中で‘265-3’は、初結実した1988年から2001年まで毎年310g以上の大果となり、糖度も高かった。この‘265-3’は2000年12月22日に‘まどか’の名称で品種登録され、公表され、その後、2001年4月24日に‘白陽’に変更された。

特性の概要

1. 形態的特性

(1) 樹の特性

樹姿は中間性であり、樹勢及び樹の大きさは中程度で‘清水白桃’よりやや小さい。枝梢の太さ及び節間長は中程度であり、長果枝がやや多い。枝梢の色は緑である。成葉の葉身の形は中、葉の大きさは中程度である。葉縁の波打ちは少なく、葉色は緑色である。蜜腺の形は球腎である。花は清水白桃より大きく、淡桃色である。花形は普通咲きで大きさは中、花卉の数は単弁で形は円形、花色は淡桃色、開花期はやや早く、育成地（赤磐郡山陽町）において4月上～中旬に開花する。花粉はない（表1）。

表1 ‘白陽’と‘清水白桃’の生育特性

品種名	樹の大きさ	樹姿	樹勢	開花期(1992～2001年)			花粉	生理的落果
				始	盛期	終		
白 陽	中	中間	中	4月7日	4月9日	4月15日	無	微
清水白桃	大	中間	強	4月9日	4月11日	4月17日	有	少

*現岡山県農業総合センター阿新農業改良普及センター、**現岡山県農業総合センター岡山農業改良普及センター、***現岡山県農林水産部、****現JA岡山

(2) 果実の特性

果実の外観は円形で、‘清水白桃’に比べて腰高となる。果頂部の凹みは浅く、梗あは深く、幅がやや広い。縫合線の深さは赤道部では浅く、果頂部では中程度である。果実の大きさは極大で、果実重が370g程度と‘清水白桃’より大きい。収穫直後の果皮色は緑白色で、完熟時の地色は白色であり、熟度が進むと乳白色になる。成熟時における緑色の退色は‘清水白桃’より遅い。果皮着色は、無袋栽培では全面に濃く着色するが、有底オレンジ袋では果頂部に斑状で微～少程度の淡い着色を呈し(図1)、『清水白桃』よりやや着色しやすい。

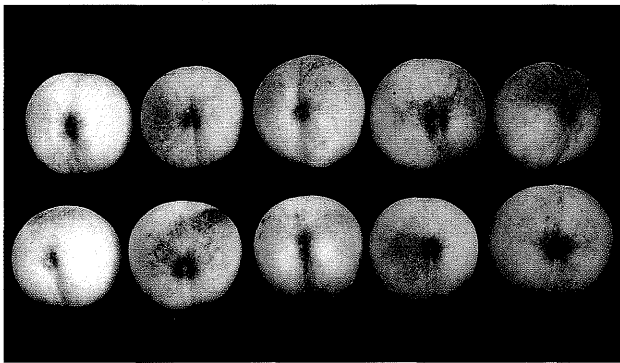


図1 ‘白陽’の果実外観

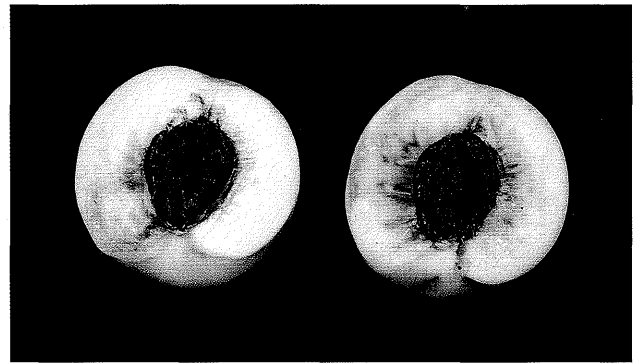


図2 ‘白陽’の果実縦断面

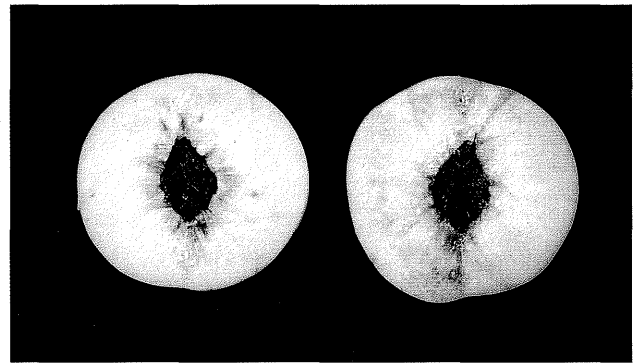


図3 ‘白陽’果実の横断面

表2 ‘白陽’と‘清水白桃’の果実特性

品種名	年次	樹齢	成熟期			収量 (kg/m ²)	果実重 (g)	糖度 (Brix)	酸味 (pH)	渋味	食味 ^{a)}	核割 (%)
			始	盛期	終							
白陽	1992	3	8月12日	8月12日	8月12日		379	11.4	4.6	無	6.6	
	1993	4	8月4日	8月10日	8月11日		359	11.0	4.6	微	5.5	10.0
	1994	5	8月5日	8月8日	8月10日		326	13.5	4.3	微	6.1	40.0
	1995	6	8月2日	8月6日	8月8日		374	12.9	4.2	少	4.3	60.0
	1996	7	8月2日	8月6日	8月16日	2.2	309	13.5	4.3	無	6.2	10.0
	1997	8	7月26日	8月2日	8月5日	2.6	371	11.2	4.6	微	5.6	10.0
	1998	9	7月15日	7月21日	7月27日	3.3	408	11.6	3.8	無～微	4.9	20.0
	1999	10	7月21日	7月30日	8月9日	4.2	372	12.7	4.1	微	5.1	36.8
	2000	11	7月31日	8月8日	8月15日	3.7	375	15.4	4.4	無	7.3	20.0
	2001	12	7月27日	8月2日	8月6日	4.4	372	12.0	4.1	微	5.1	10.0
	平均		7月30日	8月4日	8月8日	3.4	365	12.5	4.3	無～微	5.7	24.1
清水白桃 (対照)	1992	16	7月28日	7月31日	8月6日		276	11.9	4.4	無	6.2	
	1993	13	7月29日	8月2日	8月9日		311	13.3	4.6	無	8.1	10.0
	1994	14	8月1日	8月5日	8月10日		245	15.0	4.9	微	6.7	0.0
	1995	15	8月1日	8月6日	8月10日		268	14.5	4.5	微	5.9	100.0
	1996	7	8月1日	8月6日	8月12日	1.8	225	14.0	4.6	無	5.9	10.0
	1997	8	7月25日	7月30日	8月4日	1.9	295	12.2	4.7	無	5.8	15.0
	1998	9	7月17日	7月22日	7月27日	2.4	263	12.6	4.5	無	6.2	37.0
	1999	10	7月26日	7月28日	8月2日	2.7	331	13.4	4.7	無～微	7.0	36.2
	2000	11	7月31日	8月8日	8月15日	3.1	293	13.5	4.7	無	7.0	59.0
	2001	12	7月25日	8月1日	8月9日	3.3	281	13.9	4.8	無	6.8	40.0
	平均		7月27日	8月1日	8月7日	2.5	279	13.4	4.6	無～微	6.6	34.1

a) 食味は1(下下)～5(中)～9(上上)の9段階評価とした。

表3 ‘白陽’と‘清水白桃’の果実特性

品種	核の粘離	果形	香気	果 皮			果 肉		核周囲の着色	果汁	肉質	繊維の多少
				地色	着色	着色形	色	着色				
白 陽	離	円	微	緑白	微	斑	乳白	少	少	多	軟や密	や多
清水白桃	粘	扁円	中	乳白	難	ぼかし	乳白	無	微	多	軟密	少

果肉の色は白色である。果肉内の紅色素、核周囲の着色も‘清水白桃’より多く発生する(図2及び図3)。果肉の粗密はやや密で、繊維は‘清水白桃’よりやや多い。果皮の剥離性は易で、肉質は溶質、果汁は多く甘味は中程度で、屈折計示度による果汁糖度は平均12.5度で‘清水白桃’よりやや低い。酸味は少なく、苦味はないが、渋味は‘清水白桃’と同程度である。食味は中上(食味値は9段階評価で5.7)で‘清水白桃’の上下(食味値6.6)よりやや劣る。核割れ、香気は‘清水白桃’よりやや少ない。核と果肉の粘離は離核である。核の形は楕円で大きい(表2及び表3)。

2. 栽培上の特性及び留意点

‘白陽’の開花期は‘清水白桃’より3~5日早く、花粉がないため、‘ゴールデンピーチ’などの開花が早い品種の花粉を用いて、人工受粉が必要である。満開~成熟までの日数は111~120日で、育成地では7月末~8月上旬が成熟盛期となり、‘清水白桃’より3日程度遅い。離核であるため、核割れが発生しにくい。生理的落果はわ

ずかに発生するが、‘清水白桃’より少なく、果実が極大であることから、‘清水白桃’より多収となる。一方、適熟から過熟になるまでが早く、果実の日持ちは‘清水白桃’よりやや劣る。収穫が遅れると、肉質が粉質化するため、‘清水白桃’の収穫時の果皮色よりやや青みがかかった果実を収穫するのが望ましい。

摘 要

岡山県で育成し、品種登録した‘白陽’は‘清水白桃’とほぼ同時期に成熟する離核品種である。人工受粉が必要で、食味は‘清水白桃’に比べてやや劣るが、‘清水白桃’より大果であり、生理的落果が少ないことから、豊産な品種である。

引用文献

- 依田征四・岩田信一・繁田充保・海野孝章(1980) 岡山県南部における晩生モモの生理的落果(第1報) 後期落果の症状とそれを誘発する2~3の要因について. 園学要旨, 昭50秋: 64-65.